



9年目の福島、8年目の EIWAN

私たちEIWANは、東日本大震災の翌年、福島市で活動を始めていたフィリピン人女性たちと出会い、彼女たちのグループ「ハクカマイ」を支援することから、私たちの活動が始まった。2014年からは福島市に事務所を設け、さまざまなプログラムを企画し実施していったが、中には継続することができなかったプログラムもあつたり、試行錯誤の連続であった。しかし活動地域は、福島市から郡山市、須賀川市、白河市、いわき市へと広がっていった。どの地域にも、移住女性たちのグループ（震災後に作られた「小さな」自助組織）があつたからである。

2017年からEIWANは、専従スタッフを置かず、運営委員がプログラムごとに分担して、ボランティア・スタッフとともに準備し実施する体制に移行した。そして2018年4月から、「中長期事業」として第二期活動に入った。そこでは、第一期（2012～2017年）の到達点を踏まえて継続すること、いっぽう第一期において十分に展開できなかったプログラムについては引き続いてその可能性を追求することを基本方針とした。つまり、限られたヒトと、減少していくカネの中で、活動を強化する（各プログラムの内容を充実させる）ことを通して、中長期的な組織づくりと移住女性グループの自立化、県内のネットワークをめざす、ということである。



2018年11月、政府は新たな「外国人材」受け入れのため、在留資格「特定技能」の新設と、法務省外局としての「出入国在留管理庁」の設置を図る「出入国管理及び難民認定法（入管法）」と「法務省設置法」の改定案を国会に提出した。これは十分な審議を経ることなく12月8日、国会で成立。

また政府は12月25日、「外国人材の受け入れ・共生のための総合的対応策」を決定し、法務省を中心に厚労省・文科省・外務省・警察庁など関係省庁で立案・実施作業が始まった。ここでは「①意見聴取・啓発活

動、②生活者としての外国人に対する支援、③外国人材受け入れの促進、④新たな在留管理体制の構築」という4本柱を立て、126項目の施策を挙げているが、もっぱら④に注力しようとしているのは、予算措置を見ても明らかである。これらの関連予算224億円のうち④が30.8%を占め、その上、別途「不法滞在者対策費」（？）として157億円を2019年度予算に計上しているからである。また、②の「生活者としての外国人に対する支援」を見ていくと、91項目の施策のうち、予算を付けて外国人の生活・教育に寄与する施策は17項目しかなく、しかも「日本語教育の充実」に7億円、「外国人児童生徒の教育の充実」に4億円しか計上されていない。そして、その他の施策は、ほぼ地方自治体に「丸投げ」されている。

内外から批判されている「技能実習」制度が維持されると共に、今年4月から施行される「特定技能」制度の下で、福島県内にはこれまで以上に、多くの外国人労働者が来て働くようになる。だが、いま「復興途上」にある県内の地場産業や自治体が求めているのは、人手不足の労働現場の一時的な「即戦力」ではなく、中長期的な「担い手」となる労働者なのである。その意味で、「特定技能」はそのような制度設計になっていない。特定技能1号は、技能実習生と同様に、家族の帯同が認められず、また、日本経済の好不況に応じて（雇用企業の都合によって）「1年ごと」に再雇用／雇止めができる制度になっているからである。その上、農業・漁業分野の職種では、在留期間（雇用期間）が4カ月あるいは6カ月となっている。



このように見てくると、震災から9年目に入る福島においては、「外国人との共生」という政府の掛け声とは裏腹に、外国人労働者の人権問題がこれまで以上に惹き立てられ、また私たちの取り組みも苦戦を強いられることになるだろう。それでも私たちは、新たなプログラムに挑戦する。 ●佐藤信行 (EIWAN 代表)

福島サロン木曜クラス、河原でバーベキュー

EIWANは福島サロン（日本語教室）として、土曜クラスと木曜クラスを、EIWAN事務所“ふくしま活動スペース”で開いている。土曜クラスは月2回だが、木曜クラスは毎週木曜日、午前10時～12時、学習者は多いときには8人、少ないときには1人のこともある。それでも日本語サポーターは常時3～4人で、初級者から上級者までの学習者の日本語学習をサポートしている。

木曜クラスは2018年11月8日、福島市西部の「荒川桜つつみ河川公園」でバーベキューを行なった。集まったのは、日本語ボランティア4人と学習者、ケイトさん（フィリピン）、ピクラムさん（ネパール）、クリスさん・セレナさんご夫妻（フィジー）、クリスさんの両親の総勢10人。

河原にほど近い駐車場の片隅にかまどを設け、炭に火をおこしてバーベキューを開始。メニューは、牛肉、豚肉、鶏肉にウインナー、ジャガイモ、椎茸などの野菜類と焼きそば。さらに特別メニューとして、福島名

物の味噌味の芋煮。セレナさんが食材を運び、クリスさんは焼き方に徹する。この見事な連携プレーで、食材は次々と焼き上がる。一同、休む間もなく焼き上がるお肉をお腹の中へ。クリスさんの両親やピクラムさんは、「芋煮」や「焼きそば」が初めてであったが、恐る恐る口に運び、「おいしい！」と満足げであった。

晩秋のお昼、河原には笑顔と煙があふれた。

●大島博幸（福島サロン・サポーター）



郡山「幸福」の中国家庭料理教室とお弁当教室

「日中文化ふれあいの会～幸福」は、郡山市で暮らす中国人女性たちの団体で、子どもたちの継承語（中国語）教室を開いている他、2017年から地元の日本人との出会いと交流をめざして料理教室も始めた。

2018年度、EIWANの支援とたくさんの方々との協力で、「中国家庭料理教室」3回と「お弁当作り教室」を開催することができた。会場はいずれも郡山市中央公民館で、中国料理教室は9月2日：参加者11人／11月4日：参加者9人／12月22日：参加者22人、またお弁当教室は11月17日：参加者15人（うち子ども8人）であった。

「中国家庭料理教室」では、本場の味を日本人に味わってもらい、ごく普通の中国人家庭ではどんな料理やどんな暮らしをしているか、身をもって体験してもらった。日本ではさまざまな中華料理店があって、いろんな流派の料理が食べられるが、中国人の「おふくろの味」を味わえるのは、めったにないチャンス。それも、参加者たちを魅了するところでしょう。ですから、今後も内容や形式を変えながら、続けていきたいと思っている。

いっぽう「お弁当作り教室」は、「弁当」という日

本の独特な食文化に戸惑う外国出身のお母さん向けの料理教室。地元の料理家を招き、お弁当（キャラ弁）づくりのコツや、和風調味料の使いこなす方法について教えてもらった。参加者の中には「たまご焼き」初チャレンジのお母さんもいて、こんなに簡単でおいしく作れる一品に驚いていた。また、翌日に教室で覚えた料理を、自宅で作ってみた人もいた。お弁当を作る実習では、子どもたちの活躍が一番印象的で、お母さんと一緒にやってみようという子どもたちの気持ちが調理室に溢れた。



新しい一年では、身近なことや、すぐに役に立つことについて活動していきたい、と思っている。

●李莉岩（日中文化ふれあいの会～幸福）

「防災出前講座」を喜多方で開催



EIWANでは毎年、「防災出前講座」を行なっているが、2018年も会津喜多方国際交流協会でも2日間にわたって実施することができた。喜多方では、2年前に続いて2度目の開催となる。

一日目（11月22日）は日本人を対象に「やさしい日本語」講座、二日目（23日）は在住外国人を対象に「防災講座」を行ない、両日とも15人の参加者があった。今回の特徴は、両日とも「手話サークル」のメンバーが参加されたこと。参加者から多くの感想が寄せられたが、その中の一つを本人の了解を得て、以下紹介する。

「聞こえないということは、普段の生活でもそうですが、災害時はそれ以上に、いろいろな情報、大事な情報が入ってこないということ。」

喜多方市は、津波などの災害こそないものの原発事故による放射能汚染で、福島県全域が大変な状況にありました。[中略]

その後7年が経過、毎年3月には、ろうあ者の方と一緒に防災の学習を続けています。ほかにも積極的に県や市の防災訓練に参加したり、いろいろな研修会に参加したりしていますが、専門的な言葉が多く、回りくどい言い回しがあったり、わかりにくさがありました。

今回、「やさしい日本語」講座と外国人のための「防災講座」に参加してみて感じたことは、内容がとても分かりやすかったことです。一緒に参加したろうあ者の方も、同じように感じていました。これは外国人や耳の聞こえない人だけでなく、高齢者や子ども、いや誰にとってもわかりやすく、そのわかりやすさが、災害に備える際、また災害が起こった時にもすぐに役に立ち、大切な命を守ることに繋がっていくということを気付かされました。災害時だけでなく、日常のあらゆるところで「誰にでもわかりやすく伝える」という意識、こころ遣いがあれば、障がいのあるなしに関わらず、また日本語が十分に話せない外国人にとっても、住みやすい国になっていくのではないのでしょうか。

この講座に声をかけていただき、また丁寧に指導いただいたことに感謝します。>

EIWANは今年も、「防災出前講座」を県内で開いていく。ぜひご連絡ください。

●花岡正義（EIWAN 運営委員）

福島市「結・ゆい・フェスタ 2018」に出展

福島市国際交流協会は毎年秋、国際交流イベント「結・ゆい・フェスタ」を開催している。9月16日、福島駅前のアオウゼにて開催された「結・ゆい・フェスタ2018」に、EIWANもブースを出した。EIWANとしての参加は、今年で3回目となる。

1回目と2回目はまだ様子がわからなかったり、準備のための時間や人手がなかったりしたこともあって、活動紹介のパネルを掲示し、リーフレットやニュースレターなどを置いて、立ち寄ってくれた人に活動内容を紹介するのが精一杯であった。

しかし、料理の販売や、音楽やダンスの発表を行なう他の団体を見ていて、今年は当日参加できない日本語サロンの学習者やサポーターにも関わってもらえる内容にしたいと思っていた。

現在、福島の日本語サロンにはフィリピン、ベトナム、フィジー、中国、ネパール出身の学習者が参加している。またサポーターには、韓国人や、海外で生活をした経験のある日本人がいる。そこで、自分の出身国や、生活したことのある国に関するクイズを考えてもらい、「多国籍クイズ」としてフェスタの参加者に答えてもらい、正解した人には「多国籍お菓子」をプレゼントする、という企画を考えた。

フェスタ前の日本語サロンで、「あなたの国についてのクイズを考えてください」とお願いすると、同郷者同士で「あれってどうだったっけ？」「日本語でどう言ったらいいの？」などと相談し合ったり、スマホでネタ探しや事実確認をしながら一生懸命クイズを考えてくれた。



▲日本語サロンで、学習者もサポーターも総出でクイズ作成

木曜クラスと土曜クラスの皆さんで、アメリカ、オランダ、中国、韓国、フィリピン、ネパール、フィジーの7カ国、計78問のクイズができあがった。

それを3問ずつ紙に印刷し、四折りにしてボックスに入れ、ブースに来た人に、くじ引きのように1枚引いてもらい、クイズに答えてもらう。1問でも正解したら、学習者やサポーターが持ち寄ってきたいろんな国のお菓子をプレゼント。

でも、クイズの設問がちょっとマニアック過ぎて、一般の日本人来場者にはむずかしすぎる問題もあったが、クイズを通して、福島にこれだけいろいろな国から来た人たちが暮らしていること、その人たちの国の



▲フェスタ当日、EIWANブースでは大人も子どももクイズに挑戦

ことを少しでも知ってもらえたのではないかと、思う。

日本語サロンの学習者たちにとっても、クイズを考えることで、自分の国のことを日本語で伝えるいい練習になったはず。本当は、クイズを紙に書くのではなく、学習者たち本人に出題してもらって、来場者と直接やりとりしてもらえたら、もっとよかったなあと思う。

2019年は子ども向けのやさしいクイズも作って、福島の子もたちが「多文化（からふる）ふくしま」を感じられるような企画を考えたいと思う。

●水嶋いづみ (EIWAN 運営委員)

さあ、皆さんもクイズにチャレンジ……。

多文化クイズ フィリピン編 <その1>

1. フィリピンは大きく3つの地域に分かれています。「ルソン」「ミンダナオ」ともう1つは？
①セブ ②マニラ ③ビサヤ
2. フィリピンの独立記念日はいつ？
①4月12日 ②6月12日 ③8月12日
3. フィリピンでマクドナルドより人気のファーストフード店は？
①ジョリビー ②バーガーキング ③ウェンディーズ



多文化クイズ 中国(蘇州)編 <その3>

1. 中国の若者が大好きな煮玉子は、作り方に特徴があります。それは何でしょう？
①下ゆです ②殻にヒビを入れる ③お茶で煮る
2. 蘇州市の有名な観光地「虎丘」にある雲巖寺塔は何で有名？
①中国一高い ②不思議な色 ③傾いている
3. 日本の「餅(もち)」は米から作りますが、中国の「餅(びん)」は何でできているでしょう？
①小麦粉 ②とうもろこし粉 ③くず粉



福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

〒960-8055 福島市野田町2-3-2 神野ビル3F東 (JR 福島駅西口から徒歩7分)

電話 080-8215-1556 メール eiwan311@gmail.com

ホームページ <http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan>

フェースブック <https://www.facebook.com/eiwanfukushima>

送金先 郵便振替口座番号：00920-0-144820

口座名称：福島移住女性支援ネットワーク
